

小中連携を視野に入れた、中学校での情報モラル教育

東京都青梅市立第一中学校 教諭 紙澤雅一

kamizawa@bekkoame.ne.jp

キーワード：中学校、情報モラル、インターネット、携帯電話

1. はじめに

「仮想社会」と呼ばれる「ネットワーク上の社会」は、家の外に出なくても、ネットワークの世界だけでも生活が可能になるなど、現実の社会と並行して存在し、無視できないものとなりつつある。今や、子どもたちにとっては、ネットワーク上の社会生活においても「生きる力」が必要になってきた。

ネットワーク社会における「情報モラル」の授業が、学校教育で重要であると考えられる人は増えていると考えられるが、限られた時間と場所で、何をどのように扱うかは多くの学校で悩んでいる問題ではないだろうか。

2. 小中連携はなぜ必要か

中学校で、ネットワーク社会での「情報モラル」を扱う場合、「授業の時間がなかなか確保できない」、「コンピュータ室を一斉に使うのは難しい」などの問題が生じてくる。

まず、少ない時間で効率的な「情報モラル」を扱うには、生徒の実態把握は欠かせない。さらに、学区内の小学校との情報交換の中で、「地域の子どもたちをどう育てたいのか」「地域の子どもたちに何が必要なのか」を、考えていく必要がある。

次の表は、青梅市の小中学校での「情報モラル」の連携を考えた例である。

		指 導 目 標
小 学 校	3年	言葉遣いに気をつけながら「1冊の本」などの紹介文を打ち込むことができる。
	4年	読み手のことを意識しながら「1冊の本」などに簡単なコメントを打ち込むことができる。
	5年	不特定多数の人たちが見ることを意識しながら、情報発信することができる。
	6年	著作権や肖像権を意識しながら、情報発信することができる。
中 学 校	1年	著作権や個人情報の扱いに気をつけながら、情報発信することができる。
	2年	ネット上の権利と保護について考えながら、情報発信することができる。
	3年	ネット上に散在するモラルに関わる様々な問題点について考えながら、情報発信することができる。

小・中学校の連携での情報モラル指導計画（青梅市教務主任会Aグループによる）

このような、小中を通したカリキュラムをベースにした「情報モラル」の指導計画は、子どもたちの発達段階と地域の実情を考える上で重要である。

しかも、年々子どもたちの状況は変化しており、さらに、個々の学年の実態も異なるため、子どもたちの状況に合わせた指導内容を随時検討する必要がある。

3. 青梅市立第一中学校での実践

(1) コンピュータ室を使わない「情報モラル」

一般的に中学校で、ネットワーク社会での「情報モラル」の授業を行う場合、コンピュータ室で授業を行うことを想定していることが多い。これは、従来の「情報モラル」が、「メールの使い方」「ウェブでの情報発信」というような表面的な内容のカテゴリーで扱われることが多かったためである。しかし、本当の意味での「情報モラル」を考えるとき、その本質的な部分をどう指導するかが重要になってくる。学年や学校単位で、道徳や学級活動、総合的な学習の時間などでの「情報モラル」の授業を行うとき、一斉にコンピュータ室を使うことは難しいが、コンピュータ室での授業にこだわる必要はない。そこで、「情報モラル」の授業は、各学級の教室で学級担任が行うことを基本とし、扱う題材によって、「冊子などの印刷物」「紙芝居風の提示」「1台のPCによる演示」など、各学年で検討を重ね、内容に合わせた指導法を工夫した。



(2) 3つの視点で「情報モラル」を考える

本当の意味での有効性を考えた「情報モラル」の授業を実施するには、子どもたちに何が必要なのかを明確にす

